

高体連活動に新しい意義と価値を見出す広島風アプローチ
～感動発信！広島県高校生レポーターキャラバンがつむぐスポーツコミュニティー～

広島県高等学校体育連盟

1 はじめに

近年、青少年層相互の人間関係の希薄さやコミュニケーション力の稚拙さを原因とする、心痛む悲しい事件やトラブルの報道が相次いでいる。時には、親子間でさえ共感・共鳴がなくなっている危機的風潮を強く感じていた。そのとき一条の光を見た。「2007 青春・佐賀総体」でカヌー競技を視察・激励した時のこと。選手と指導者、そして祖父母・両親・兄弟などの応援者までも心一つにして戦っていた姿に鳥肌が立った。その姿が時代の風潮を変えるかもしれない、その姿を多くの人に伝えたいと考えた。高体連活動に授けられた「大切な使命」と感じた。その思いの具現が、「広島県高校生レポーターキャラバン」である。

スポーツを「みて」、その感動を世に広く「伝える」ことによって、スポーツに関わる人たちを「支える」という、高体連活動の新しい意義、そして価値を見出すための活動を創造したいと考えた。

翌年、さまざまな方の厚いご支援・ご協力によってキャラバンの活動がスタートした。今年で3年目となり、多くの方に周知していただくまでになった。本研究大会では、高体連活動に新たな意義や価値を見出す一つの方法として「広島県高校生レポーターキャラバンがつむぐスポーツコミュニティーの創造」への歩みを報告する。

2 提案理由

高体連はその役割として、スポーツ活動の振興を図るとともに、生徒の健全育成、選手の競技力向上を目指しているが、主として競技者を支援し、競技者の成長を図ることに重きを置いてきたように思う。インターハイを目標とした競技力向上とそれを果たすべく人間形成という大きな意義には誰もが共感を持つであろう。しかし高体連活動はその意義にさらなる多面性・多様性を有しており、ともすれば、まだ高い認識がなされていないそれらをひとつずつ明確にし、加えることが高体連活動の課題にたいする取り組みであると考えた。

仮に競技者ではなくても、スポーツを「応援したい・支えたい」という気持ちを持った高校生が、高校スポーツの持つすばらしさに共感し、それを多くの人々に「伝える」ことで心豊かな感性を磨き、人間性を育む一人に成長することができるということ。さらに、「伝えられる」ことで、スポーツの感動を共有する人が増え、その結果、より多くの人が「スポーツを支え、スポーツに支えられている気持ち」を共有し、家庭・学校・地域で「スポーツマインド」が創出され、「スポーツコミュニティー」をつむいでいくこと。

これらへの取り組みが高体連活動の多様な意義や価値を見出すことにつながるのではと考え、その取り組みの主体として「広島県高校生レポーターキャラバン」を創設した。競技者と同じ10代の感性で広島県高校総体や全国高校総体で頑張っている選手や指導者、家族や応援している人々を取材し、スポーツに真摯に取り組む姿を広島県高体連ホームページ上で情報発信するチームを立ち上げたのである。

今回の提案は、「スポーツをみて、そのすばらしさを伝える取り組みをする」ことによって、「スポーツをする人たちだけでなく、スポーツを支える人たちも喜びや生き甲斐をもって人間性を育み、スポーツコミュニティーを創造することができる」という新たな意義や価値を高体連活動に加えようとする「広島風アプローチ」である。

3 広島県高校生レポーターキャラバンとは

【定義】 スポーツのすばらしさを伝えるという使命感を持って、スポーツに係わる人たちを支える組織。

【目的】 情報発信などによってスポーツを支え、スポーツコミュニティーを創造し、日本中を幸せにする。

【目標】 ①目的意識をもった意欲的な研修により感性とコミュニケーション能力を磨く。

②スポーツの持つ感動をテーマに取材し、そのすばらしさを発信するなかで自らの人間性を高める

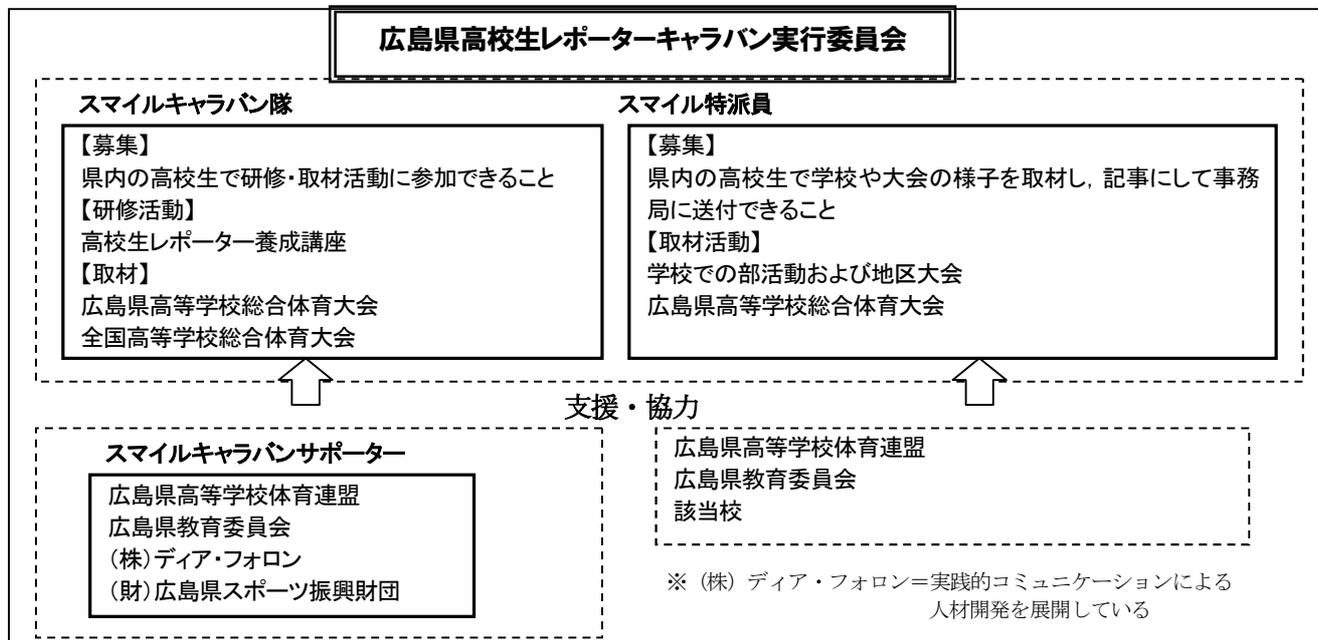
4 広島県高校生レポーターキャラバン実践報告

(1) 活動概要

高校生を主体とした、情報発信のための企画・運営活動

- ・レポーター養成研修
- ・県高校総体及び全国高校総体の取材と情報発信

(2) 組織図



(3) 活動計画

3月～4月	準備委員会
5月上旬	結団式
5月～7月	研修 (高校生レポーター養成講座) 取材 (広島県高等学校総合体育大会)
7月～8月	取材 (全国高等学校総合体育大会)

(4) 活動内容

①研修講師

講師名	役職・略歴等
池本よ志子氏	【高校生レポーターキャラバン総合プロデューサー】 (株)ディアフォロン代表取締役であり、企業活力支援士として地域・企業・学校など様々な場所で実践的コミュニケーションによる人材開発を目指し、活躍されている。
相原恒樹氏	写真館「櫓山館」を経営。「地球を撮りたくて・・・」と、とうとう地球のてっぺんの北極点に立った世界的冒険写真家で広島県内高校の卒業アルバムを多数手がけられている。
安藤欣賢氏	中国新聞元論説委員。社説やコラムの執筆、被爆作家の評伝、中国山地の過疎を取材した「新中国山地」、「広島城四百年」の刊行など様々なジャンルに関わって執筆をされた。(故人)
天野稔也氏	中国新聞社 総合編集本部報道センター運動部長。中国新聞社に入社後は、主にスポーツ記者として活躍。1994年の広島アジア大会や96年アトランタオリンピック等豊富な取材経験を持ち、東京支社記者、岩国総局長などを歴任。

②日程

【平成22年度の展開例】

月・日・曜日	活動内容	詳細
5月8日	実行委員会結団式	顔合わせ、実施要綱説明
	高校生レポーター養成講座第1回 (講師:池本よ志子氏)	目的の理解、目標の設定、コミュニケーション力
	高校生レポーター養成講座第2回 (講師:相原恒樹氏)	記録写真とは何か、写真の撮り方 (実践)
6月5日	高校生レポーター養成講座第3回 (講師:池本よ志子氏)	インタビュー・レポート研修 (要約メモ・レポート作成)
	第63回広島県高等学校総合体育大会取材とHPのアップ	総合開会式・ボクシング・バドミントン・剣道・新体操競技・ソフトテニス

6	日	高校生レポーター養成講座第4回	取材の方法（取材対象の把握・先入観への注意・取材の流れ） 写真の撮り方（スポーツ場面の撮影技術・大会撮影の手段と実践）	
	13	日	高校生レポーター養成講座第5回（講師：池本よ志子氏） 高校生レポーター養成講座第6回（講師：天野稔也氏）	チームとしての使命と自己変革 取材記事の書き方（抑制した表現使用・本記とサイド記事の書き方）
			第6回広島県高等学校総合体育大会取材とHPのアップ	バレーボール
7	17	土	高校生レポーター養成講座第7回（講師：池本よ志子氏）	研修のまとめ・インタビュー取材計画
	28	水	第63回全国高等学校総合体育大会 【2010 美ら島沖縄総体】取材とHPのアップ	総合開会式 沖縄県高校生写真班への取材交流
	29	木		バスケットボール男女・弓道・バドミントン 琉球新報からの取材
	30	金		バスケットボール男・弓道・ボクシング
	31	土		バドミントン 糸満市高校生取材班からの逆取材交流 ※1名 日本コカ・コーラ主催「沖縄総体体験レポーター」に合流 ～8/3
		剣道		
8	5	木	カヌー・剣道・ソフトテニス・バレーボール女	
	6	金	バレーボール女	
	7	土	ウエイトリフティング・ソフトテニス・ソフトボール・卓球・新体操	
	8	日	新体操	
	9	月		

(5) 成果

①取材記事（抜粋）

『気合いの投球！』（2009 近畿まほろば総体：8月4日 男子ソフトボール）

尾道商業の守備を支えたのは、ピッチャー・山本祐也選手だ。ジリジリと照り付ける日差しの中、最後まで懸命に投げ抜いた。「後ろの仲間やベンチ、応援席からの声援が支えになった」。体力にあまり自信がないという山本選手。とにかく気力で投げ抜いたという。「途中で故障した2人はチームの要の選手だったから、正直少し動揺した。その中で諦めず、落ち着いて投げ切ることができたのは、みんなの応援のおかげだと思う」

そう振り返った山本選手は、今まで自分たちを支えてくれた保護者の方々に、次のような言葉を残してくれた。「試合の度にお茶や水を用意してくれ、遠いところである試合には毎回車を出して送り迎えをしてくれた。本当に感謝しています」。真っ赤に日焼けし、汗を流す姿からは、彼がどれほど真剣に試合にのぞんだのかがはっきりと見て取れた。その姿こそが、きっと、保護者のみなさんへの最高の恩返しなのだと思う。

山本選手や、キャプテンの高畑選手をはじめ、尾道商業からは4人の選手が広島県の選抜チームに選ばれている。「県選抜では、さらに上手な選手たちと対戦することになるので、足を引っ張らないよう頑張りたいです」感謝の気持ちを力にし、山本選手はまた大きな活躍を見せてくれるはずだ。

（2年女子レポーター）



バスケットボール男子：大阪市立住吉スポーツセンター（2009 近畿まほろば総体：7月29日）

バスケットボール女子：大阪府立体育会館OBIに質問！宇野實さん・馬本力さん

女子一回戦、広島皆実 VS 金沢西で皆実高校の応援に来ていた宇野實さんは、皆実高校の3期生でバスケット部のOB。当時のバスケット部について伺ってみると、「県代表になったり、市内で優勝候補になるくらい強かった。当時、コートはコンクリートで、ずっと外練。こけたら擦り傷が出来ていた。皮のボールだったので、糸で修繕していた。今の皆実高校はレベルが高く、特に女子は自分達の頃とは比べ物にならないくらい強い」と、当時の様子が目に浮かんでくるようだ。

また、男子の試合会場ではOBであり、後援会の会長である馬本力さんにお話を伺った。馬本さんは「バスケット部の子達は本当にいい子ばかり。嫌がられる程応援に周っている。みんな自分の孫のよう」と、笑顔で語ってくれた。また「選手には、周りで支えてくれる全ての人達への感謝の気持ちを忘れずに頑張ってもらいたい！」とエールを送っていた。

（1年女子レポーター）



『高体連から高文連へ』（美ら島沖縄総体2010：7月28日 総合開会式）

沖縄県立真和志（まわし）高校の写真部の顧問である津波古明香（つばこさやか）先生は、「沖縄県の写真部の生徒達が、積極的に自分達から動いて写真を撮れるようになれば、この企画をやった意義がある」。初めての機会の為、生徒も先生方も戸惑いが多いだろうが、生徒と二人三脚で歩む津波古先生の温かい思いが伝わってきた。

（2年女子レポーター）



『全ての人に感謝』（美ら島沖縄総体2010：8月6日 カヌー）

「やってよかったです！とても濃い3年間でした。まだやりたいです」とキラキラした笑顔で話してくれたのは女子キャプテン野間本紘子選手だ。「チームが支えてくれるから自分たちもレースができるんです」と、日々練習で一緒にオールを握る仲間たちへ感謝の気持ちを言葉にした。そして、いつも近くで見守り、声をからしながら遠くまで声援を送ってくれる保護者、さらにカヌーという自分が夢中になれるものと出会わせてくれた中学校の先生へも感謝の気持ちを忘れない。

何より、「自分がつらかった時に声をかけてくれたり、支えてくれた沖監督にとっても感謝してます」と、笑顔の表情からもその気持ちは伝わってきた。決して、1人ではスポーツはできない。自分がスポーツをすることができるのは、たくさんの周りの人が支えてくれるからだ。直接的な言葉ではないけれど、常に人に感謝という気持ちを持っている野間本選手はすばらしいと思った。野間本選手が去った後、沖監督にその言葉を伝えると、監督の目にうっすら涙が浮かんだ。

（2年女子レポーター）



『珠玉の出会い』（美ら島沖繩総体 2010：8月4日 番外編）

長い視察を終え、帰路についていた。疲れた心身を癒しなさいという『神のお告げ』を感じ、引き込まれるように首里城近くにある『首里てらす(カフェ)』の入り口の戸を開けた。

カフェに入ると、美人姉妹オーナー：比嘉里江さん(29)・糸数江利子さん(21)のとびきりの笑顔に迎えられた。疲れた心身を癒しつつ、とりとめのない会話を楽しんだ。そんな中、広島県高校生レポーターキャラバンの話を始めると、レポーターの成長に感動してくれる二人。そして、ホームページを開き、記事を読み、「本当にすばらしい高校生さんたちですね」と、涙してくれたのである。

さまざまに自己変革への欲求を持って参加してきているレポーターたち。そんなレポーターたちが、コミュニケーション能力を高め、感性を磨き、感動を伝えることができた喜び。沖縄で出会った彼女たちの涙に、私はレポーターの心になって感激した。感動の嵐が舞い上がったこの至極の瞬間を、そして彼女たちに出会えたことに心より感謝したい。

このように、「感動の輪」が広島から沖縄へ、そして日本中に広がっていけば、こんなハッピーなことはない。この沖縄で、レポーターキャラバンの目的「スポーツコミュニティー」がまた一つ花開いた。

この『珠玉の出会い』は、この夏一番の感動に出くわした瞬間だった。 (広島県高体連理事長)



②美ら島沖繩総体2010 高校生レポーターキャラバン参加生徒の感想

(2年女子レポーター) 今までの私なら取材なんて恥ずかしくて出来ないと思っていました。しかし5月からこの総体に向けての準備・研修を受けていくうちに、もっと多くの人に話を聞いて、様々な事が知りたいと思うようになってきました。人間として成長するために学べたのではないかと考えています。これからの生活にこの経験を生かしていきたいと思います。

(2年女子レポーター) インターハイで、1番印象に残っているのは、新体操の団体の部です。スポーツを見て、鳥肌が立つほど感動させられる競技に出会ったのは初めてでした。ここに参加していなければ、新体操を見て感動することもなかったし、このように多くのスポーツと関わることはなかったと思います。

(2年女子レポーター) 選手として出会った高校生、レポーターとして一緒に過ごした高校生・・・本当にいろんな高校生に会い、話し、心がきれいになった気がします。取材ではずっと鳥肌が立っていたような気がします。見たことや、経験がない競技でも、選手の頑張っている姿と会場の雰囲気に感動したのが大きかったです。

(1年女子レポーター) 沖縄に来るまでは、スポーツを見て感動とかあまりなかったのに、剣道で選手や先生の涙にもらい泣きしそうになったり、卓球で素直にすごいものをすごいと言えたり、自分でも実感できるくらい心に変化がありました。

先輩や先生にたくさん迷惑かけて、沖縄の人たちにお世話になり、大会の会場で選手や監督さん、委員長さんに親切にもらって、この5日間は感謝の連続でした。自分が変わったのは、たくさんの人のおかげです。

まだ熱い人間になるという目標が達成できていないので、沖縄で過ごした5日間の感謝や感動を忘れずいつでも全力でいろんなことに励みたいと思います。

(3年女子レポーター) 3年間、関わらせていただいたことにまず感謝したいと思います。3年間の集大成となる今回の沖縄インターハイの活動で、コカ・コーラ特派員としての活動を含め1番強く感じたのは、高校生がインターハイで取材活動をするという、この素晴らしい活動を、もっと多くの人(特に高校生)に知ってもらい、積極的に関わってもらえるようになったらいいなということです。「スポーツ」を通して得られる感動は、私たちの考え方や価値観または人生観に大きな影響を与えます。だからこそ「インターハイ」を今のように、一部の人だけのものにしておくのはもったいないと思うのです。1人でも多くの人に「インターハイでしか得ることのできない感動」に出会ってもらいたいです。

(6) 成果と課題

① 次の※印の生徒たちのように、高校生がスポーツによって感性を磨かれ、活動意欲を授けられたということは、この活動が高体連の活動目的である「健全育成」や「競技力向上」・「生涯スポーツ実践」へとつながったということである。

※レポーター活動の経験が転機となり、自分を変えたいという意志を持って新たに運動部に所属した生徒

※それまでとは打って変わって自信を持って競技に打ち込み、国体出場を果たした生徒

※高校3年間連続レポーターキャラバンに参加し、その間広島県高等学校運動部活動研究大会において約80名の教員集団を相手に30分間「広島県高校生レポーターキャラバン活動報告」の発表をやり遂げ、3年目の沖縄の夏には日本コカ・コーラ主催の「美ら島沖縄総体2010体験レポーター」へも選出され、ジャーナリストを目指して受験勉強との両立を図りながら意欲的にレポーター活動を展開した生徒

② 5月から始まった前半のレポーター養成研修期間や6月の県総体取材活動では不慣れかつ消極的な姿勢が目立ち、スポーツの感動や、選手・保護者の思いが伝わるような記事を書くことはとても難しいことだと感じていた生徒も、研修や取材経験を重ねるうちに、質問内容が工夫できたり、取材を受ける側の立場に立って心遣いできるようになったことで自信を持ち、取材や記事を書くことに積極的になっていった。

そして、全国総体では「レポーターとしての使命感」とともに「かけがえのない経験」としても取材を楽しむことができ、選手の姿に感動し、記事を書くことで達成感を得ることができるようになった。

③ 「自分が涙を流しながら書いた記事を、涙を流して読んでくれた先生がいた」「行く所々でお世話になった人たちに心から『ありがとう』と思えるようになりました。」「考え方を変えたい、自分を変えてみたい、そんなときにレポーターキャラバン参加への声をかけていただき本当にうれしかった」「自分と関わりのない人(選手)が頑張っている姿を見て感激し、涙するとは思ってもみませんでした。泣いている自分に自分が驚きました」という今年のキャラバン参加生徒の感想文である。生徒が様々な経験を通して感謝の気持ちや自己の変わりようにその驚きを率直に綴っている。

取材をし(みて)、記事を書くこと(伝える)によってスポーツを「支える」レポーターキャラバンの活動が確実に生徒の内面・心の深奥に迫り、自己変革を促すための有効な手段となっている。

④ 3年間にわたる広島県高校総体取材及び埼玉・近畿・沖縄での全国高校総体レポーター活動と広島県高体連ホームページへの情報発信等により、レポーターキャラバンの活動への認知度が徐々に高まりを見せ、広島県内、全国高校総体開催都道府県、全国高校総体支援企業(日本コカ・コーラ等)等へ「スポーツをみて、伝えて、支える」ことの意義と価値が伝わってきている。

⑤ 3年間の活動で徐々に認知され、毎年関心を持ってもらえる高校も増えてきたが、同じように募集PRをしてもキャラバンの存在さえも知らないといわれるところがあるのも現実である。広島県高体連の支部組織は5地区に分かれているが、それぞれの地区の研究部を主管とする活動拠点を置くなどして、この活動が県内の一部だけでなく、全県的に活動の輪が広がるような展開ができる組織と意識づくりが急務である。

5 まとめ

広島県高校生レポーターは、運動部活動で感性を磨き、人格を向上させている多くの高校生と同様に、スポーツの取材を通じて感動を共有し、感性とコミュニケーション能力を磨き、人間性を高めている。自己の成長に、役に立ったという喜びに、涙を流すほどの感動を味わっている。

この夏、沖縄での取材中に、糸満市役所が募集した高校生特派員から「待っていました。広島のレポーターキャラバンが必ず来られると思っていました」と逆取材を受け、交流会を持つことができました。バスケの取材中に、広島のレポーターが涙を流しながら取材している姿が目にとまったのか、琉球新報の記者からも取材を受け、その紙面を飾った。総合開会式を取材する沖縄県高校生写真班への取材を行い、両県高校生の交流を持つことができました。一日の取材が終わり、ふと立ち寄った首里城の近くの「カフェ首里テラス」のオーナー姉妹には、レポーターの成

長と取材記事に涙してもらった。

広島では、学校の先生方・保護者・地域の支援者など多くの人々に、キャラバンのホームページを楽しんでもらっている。「今年も来たんね！頑張りんさいや！」と声を掛けてくださる保護者が増えてきた。各専門部委員長による取材への協力体制が整ってきた。ある県立高校においては、国語の教諭がキャラバンのスタッフとして高体連事務局員となることを快く承諾してもらい、学校をあげての支援体制をつくってもらった。ホームページを見た通信制の学校長から「何でこんなすばらしい活動を、もっと宣伝しないのか。来年は是非とも本校の生徒を参加させたい」との電話があった。

こうした沖縄や広島での「スポーツを通じての交流や支援」は、「広島県高校生レポーターキャラバンがつむいだスポーツコミュニティー」であり、「スポーツを支援する人たちが、スポーツをする人たちと同じ土俵で感動を共有し、語り合える場の創造」という高体連活動の多様な意義のひとつを見出し、価値あるものとして一歩踏み出したと言っても過言ではないだろう。

このレポーターキャラバンの活動は、単年度（実質は4月から8月までの5カ月）という短期間の取り組みで実践の効果をあげなければならない。そこで、レポーターの「力の要素」となる「聞く・話す」「見る・撮る」「書く」の各界プロフェッショナルに指導を仰いだ。幸いにも広島県では、実践的なコミュニケーションによる人材開発や中学校の総合学習を手掛けている企業活力支援士に総合プロデューサーを依頼することができた。またプロの写真家や新聞社の現役運動部長にも研修をお願いして、キャラバンレポーターの成長を支えていただいた。そのプロの研修指導は参加した高校生の成長だけではなく、サポーターとして支援する教員の成長も促した。「教員が変われば、生徒も変わる。キャラバンを通じて教員が成長すれば、生徒も成長し、学校も変わる。学校が変われば地域も変わる。今だけでなく、未来をよくするためのプロジェクトを目指す」の方針で、教員も生徒といっしょに研修した。そして日々の学校教育活動において、生徒の「見る・聞く・話すなどのコミュニケーション力」を養成する力量を身につけることができた。

広島県のこの取り組みは、「高体連活動に新しい意義や価値を見出す」という高体連の課題に対応するための一つの方法であり、「スポーツをしている人は自己を磨いて成長するが、実は見ている人も感動を分かち合い、伝え合い、語り合うことによって自己の成長を図り、スポーツコミュニティーを創造することができる」という新しい意義と価値観を提案するものである。

3年前には思いもしなかったが、今年度の美ら島沖縄総体を通して、加速度的に「スポーツコミュニティーの意義と価値」が伝わっていることを実感した。総合開会式後の取材交流をしてくださった「沖縄県高校生写真班」。うれしい逆取材によってレポーターキャラバン活動の価値を再認識させてもらった「沖縄県糸満市役所」ならびに「琉球新報」。広島県のこの取り組みを見て、レポーター活動の重要性を認識してもらい、インターハイの意義と価値を高めるべく、新たに「コカ・コーラ インターハイ体験レポーター」を全国に募集された日本コカ・コーラ株式会社・・・。

このように「広島県高校生レポーターキャラバンがつむぐスポーツコミュニティー」は高体連活動の意義を伝え、価値を高めることに向けて一歩を踏み出した。この広島からの小さな一歩が、「全国高体連活動」や「スポーツを愛する高校生たち」への一助となれば幸いである。